

董康『書舶庸譚』九卷本譯注（八）

芳村弘道

書舶庸譚卷八下

〔民国二十四年、昭和十年、乙亥歲、一九三五年 五月七日から同月十八日〕

七日

晴れ。靜嘉堂の藏書は、吳興（浙江省湖州市）の北宋樓の舊物で、岩崎氏が購入したものである。価格は低廉であつたけれども、孤本がまことに多い。岩崎氏は長澤〔規矩也〕君を招き調査整理に當たらせた。別に目録（昭和五年十二月刊『靜嘉堂文庫漢籍分類目録』）が刊行され通行している。聲價はほとんど圖書寮に等しい。中國からの使者が日本に来ると、砧田村（靜嘉堂文庫の所在地の舊名、砧村。現東京都世田谷區岡本）に車を停めないことはない。前年（一昨年の十二月十日、本書卷六の該日條參照）、〔楊〕无恙とここに來たが、その時は毎日、講演に追われていたので、大雑把に花を一覽したようなものであつた。數日前に長澤君が二度目の訪問に誘つてくれた。〔陶〕心如（陶洙）と〔湯〕愛理も興味を起こした。田中〔慶太郎〕と會い、

出かける準備をいっしょにした。そこで高〔錫昌〕君を招き轉記の手傳いをしてもらうことにして、本日、同行することに決めた。九時頃、同行者が相前後して集まる。自動車を備い、一時間ほどで岩崎氏の別荘（靜嘉堂文庫）に着く。仁井田〔陞〕君がすでに到着していた。司書は變わらずに飯田〔良平〕君で、目録を検索して古版本十一種を出してもらう。分擔して筆記したので、前回よりも正確となつた。四時に閱覽終了。同行者を招待して新宿の印度料理店に行き晚餐する。電車でお茶ノ水橋まで行き、歩いて旅館にもどる。玉姫に手紙を出す。

皇朝編年備要二十五卷補刊編年備要五卷

宋紹定本。卷一より卷二十に至るまでを存す。餘の五卷は並びに補刊にして、俱に汪閔源（清の汪士鍾）の影抄。四周單邊。序は四篇。一は前太學生の莆田の陳均、三葉【半葉六行】。二は紹定二年（一二二九年）三月辛卯、建安の眞德秀、七葉【半葉六行】。三は紹定乙（己）丑（二年）中秋、長樂の鄭性之、五葉【半葉五行】。四は紹定二年冬十一月南至（冬至）、朝議大夫直敷文閣新知漳州の林崑、■葉【半葉■行】。

四序俱に草書】。次は「凡例」、「皇朝編年備要參用凡例」と題す。「正例」は「災祥」「沿革」「號令」「征伐」「殺生」「除拜」の六則に分かつ。「雜例」は「行幸」「賜宴」「繕修」「郊祀(祠)」「賞賜」「進書」「振恤(郵)」「蠻夷朝貢」「蠻夷君長死立」の九則に分かつ。次は引用書目、「皇朝編年綱目備要引用書目(諸書)」と題す。各目は俱に低三格。次は「目錄」、「皇朝編年綱目備要目錄」と題し、尾も同じ。每半葉八行、每行十六字。毎代の帝王は頂格。干支の紀年は橢圓白文を用ひ以て之を別かつ。(目錄)末葉の後(前)半葉の第四行に「已後五卷見成出售(已後の五卷は成るを見て出售す)」の一行有り。此れ即ち嗣出の意。汪抄は、即ち嗣出の者に據りて抄補す。是れ此の本は乃ち初印の未だ足らざるものにして、殘本には非ざるなり。正文の行款は目錄に同じ。小字は二十三、四字不等、雙行にして線界を用ひて隔つ。首行「皇朝編年綱目備要卷第幾」と題す。下欄に齊しく「凡幾年」と紀す。卷首(尾)は數行を隔て題は首行に同じく、而れども紀年の字無し。次行「壺山陳均編」と題し、每字離隔す。板心は上下線口、上に字數を記す。魚尾の下に「備要幾」と標す【「凡例」の照標、或いは「例」字のみ。序・目は「備要」の下に於いて「序」「目」の字を増す】。下魚尾の下に葉數を記す。欄外の左角に元號紀年有り、而れども匡無し。補抄の二十一より二十五に至るまで、「編年」(「の下」)にて空格、「綱目」の二字無し。補刊の影宋本は、卷第銜接して下り、行款は俱に同じ。前に目錄無し。卷二十六より二十九に至るまでは徽宗と爲し、卷三十を欽宗と爲し、首行「九朝編年備要卷第幾」と題して、卷尾も同じ。惟だ欽宗は每首行に「凡幾年」無し。宋諱、「匡」「義」「貞」「勗」「桓」

「構」「購」「慎」等の字を避く。「二酉齋藏書」「士禮居」「丕烈」「堯圃」「閩源眞賞」【俱に篆書朱文】、「嚴蔚」「汪印士鍾」【俱に篆書白文】等の記有り。

目錄(引用諸書)

- 皇朝國史紀志列傳
- 皇朝實錄
- 皇朝會要
- 續會要
- 稽古錄
- 續通鑑
- 國紀
- 中興小曆
- 九朝通略<sup>(6)</sup>
- 東都事略
- 丙申錄
- 丁未錄
- 十朝綱要
- 十朝政要
- 開基事略(要)
- 建炎以來繫年錄
- 經濟錄
- 長編紀事本末
- 三朝北盟會編
- 司馬文正公
- 李侍郎燾
- 徐侍郎燾
- 熊舍人克
- 前人
- 王公侑
- 李公侑
- 前人
- 李左史重
- 蔡尚書幼榮(學)
- 陳侍郎傅良
- 李祕讀心傳
- 趙丞相汝愚
- 楊公仲良
- 徐參議夢莘

八朝名臣言行錄 朱文公熹  
中興紀事本末 學士院進

右の諸書の外、他に旁參互證の者有れども盡くは録せず。

### 重修毘陵志三十卷<sup>7)</sup>

宋咸淳刊初印本。卷七より二十に至るまでを存し、仍ほ抄補有り。左右雙邊、每半葉九行、每〔行〕大小俱に二十字。首行「重修毘陵志卷第幾」と題す。卷尾同じきも、惟だ隔つること一行より三行に至り不<sup>8)</sup>等、或いは直ちに正文に接す。板心の上に字數を記し、魚尾の下に書名を標し、下魚尾の下に葉數を記す。題跋は後の如し。

卷十二は、一（第一葉）より四に至るまでを存して下は缺く。末葉の板心に剝痕有り。特だ趙氏の重刊本已に補完するや否やを知らず。〔卷十三、十三葉の〕藥の屬を〔缺く〕。

趙氏の『亦有生齋文集』卷七を閲するに、是の書の跋有りて甚だ詳しく、録して後に附す。又續集卷四に「重刻毘陵志跋」有り。重刻本、之を求むること數年なれども得ず【此れ陸氏の筆、下跋の旁らに批す】。

是の本の紙墨行款、余の見る所の士禮居藏の宋葉本『中興館閣錄續錄』と同じ。惜しむらくは前に六卷を闕き、從りて其の原始を考ふること無し。志中の秩官の人物は皆咸淳の年に截止す。故に定めて咸淳毘陵志と爲す。其の「重修」と曰ふ者は、考ふるに馬端臨の『文獻通考』『經籍志』史部に「毘陵志十二卷、鄒補之撰」と有り。此の書は七卷より十九卷に至るまでを存し、末一卷（の

板心と尾題の卷次）は乃ち二十以下の字を剝去し、以て配し足す

者なり。是の書は當に二十幾卷有るべし。其の十二卷に據りて重修する者爲ること、當に知るべきなり。「經籍志」既に載せず、他も亦た罕見、宜しく之を珍とすべし。

丁卯十一月翰■記す【以上、俱に首冊の副葉に在り】。

鄒補之は州學の教授。淳熙十四年八月滿【卷九に在り】。

### 武經七書<sup>14)</sup>

宋槧宋印本。左右雙邊、每半葉十行、每行二十字。前に總目有り。凡そ『孫子』上中下三卷、『吳子』上下二卷、『司馬法』上中下三卷、『唐太宗李衛公問對』上中下三卷、『尉繚子』五卷、『黃石公三略』上中下三卷、『六韜』六卷。每種の首行「某書卷幾」と題し、尾も同じ。『六韜』内の子目は低五格或いは四格。板心の上に字數を記す。魚尾下に本書名並びに次第を標し、節せずして中に葉數を記す。下に刻工姓名を記し、「吳榮〔二〕」「求」「施〔昌〕」「白〔石〕」「云〔朱云〕」「弓」「文」「用」「汪萼〔汪彥〕」「金嵩」等の如し。『禮部官書』、『泰峰』【俱に篆書朱文】、「郁印松年」「汪印士鍾」【俱に篆書白文】の諸記有り。

### 李太白文集三十卷<sup>17)</sup>

宋蜀刻本。每半葉十一行、大小二十字、小字は雙行約二格もて三字に作る。左右雙邊。首行「李太白文集卷第幾」と題す。各卷の後、一行を隔て題款同じ。前に目錄有り。目は低三字。卷一は李陽冰「草堂集序」、前進士魏顥「李翰林集序」、樂史「李翰林別集序」、李華「翰

林學士李君墓誌」、劉全白「翰林學士李君碣記」、范傳正「翰林學士李公新墓碑」、裴敬「翰林學士李公墓碑」と爲す。卷二より卷二十四に至るまでは歌詩と爲す。卷二十五以下は文と爲す。前に目有り、並びに「學士贈右拾遺李白【李白の二字は跳行】」と題す。卷末に「李太白文集後序」有りて、「夏五月晦常山宋敏求題」、「南豐曾鞏序」、「元豐三年（一〇八〇）夏四月信安毛衛（漸）校正敬（謹）題」を■次し、俱に聯屬す。魚尾は「李幾」に作り、目は「李目」に作り、後序は「後序」に作る。宋諱、「玄」「絃」「敬」「警」「驚」「弘」「殷」「匡」「鏡」「竟」「胤」「貞」「頰（頰）」「徵」「樹」「讓」「桓」等の字を避く<sup>18</sup>。收藏圖記は紀すを漏らす。

王右丞文集十卷<sup>19</sup>

南宋本。每半葉十一行、每行大十九字より二十二字に至り不等。小字雙行。左右雙邊。前に目錄十二葉有り。每卷の首行は「王右丞文集卷第幾」と題し、卷尾は一行を隔て題同じ。卷一の第三行、卷二より卷四に至るまでの次行は、銜名「尚書右丞贈祕書監王維」と題す。「王」の下は空一格、「維」の下は空四格、或いは一、二格不等。卷三以下は俱に連接し、卷四、卷五は正文に直接す。尾及び首行の題字並びに銜名は俱に略す。蓋し唐の卷子より出でん。板心の上に字數を紀し、魚尾の下「王詩幾」、「王集幾」或いは「文集幾」。下魚尾の上に葉數を紀し、下に刻工姓名を紀し、「茂」「吳」「先」「通」「官信」「發」「洪」「王」「徐（余）彦」「阮光」「官先」「祥」「信」「俊」等の如し。徐乾學の「乾學之印」「健菴」、季振宜の「季振宜字詵兮號滄葦」「季振宜

藏書」「振宜之印」、黃丕烈の「百宋一塵」「黃丕烈印」「復翁」「蕘圃過眼」「士禮居」「蕘圃卅年精力所聚」、汪士鍾の「平陽汪氏藏書印」「汪士鍾印」「閩源眞賞」、「秋浦」「憲奎」（清の汪憲奎）、「張■私印」、「李銘私印」「省■<sup>20</sup>」、「謙牧堂藏書記」（清の揆叙）、「賞奇閣閣」、「顧千里以字行」（清の顧廣圻）、「有竹居」（明の沈貞吉）の諸記有り。卷六の後空行にして識語四行零二字有り下の如し【每行十五字】。

韋蘇州の詩は韻高くて氣清し。王右丞の詩は格老にして味長し。皆五言の宗匠と雖も、然れども互ひに得失有るも、優劣無からず。標韻を以て之を觀れば、右丞は遠く蘇州に遠ばず。其の詞の迫切せずして味の甚だ長きに至りては、蘇州と雖も亦た及ばざるなり。吳郡袁娶曾て觀る【卷四・五の欄外】

泰輿の季振宜滄葦氏珍藏【卷十末葉の欄外】

此の麻沙宋刻の王右丞詩文全集【十卷】は、道光丙戌歲（六年、一八二六）、藝芸主人（汪士鍾）より借り出だし一部を影寫す。復た徧く他本を取り、其の得失を勘ふるに、宋刻と雖も亦た誤り有り。而れども以後の妄改に似ず、究めて第一と爲すなり。遂に數語を帙端に題す。餘の文は繁くして具には出さず。思適居士顧千里【卷一副葉】

第六卷第二首の「出塞作」、一行、計二十一字を脱す。今、時刻に據（据）り、「馬、秋日平原好射雕、護羌校尉朝乘障、破虜將軍夜渡遼」を補ふ。此れ宋刻の「誤りの」掩ふべからざる者。<sup>21</sup>

辛酉（嘉慶六年、一八〇一）秋孟 蕘圃氏丕烈識す。  
【卷六副葉】

此の宋刻王右丞文集十卷二冊は、頃余の友の陶蘊輝（書買の陶珠琳）、都中より寄せ來りて之を得る者なり。是れより先、蘊輝の蘇に在りし時、余は與に古書を商推し、『讀書敏求記』の中の物、須からく我が爲に之を購ふべし、と謂ふ。今茲八月中旬、人の北より來たる者有りて、我に三種の書を寄す。此の本より外、尚ほ元刻の『許丁卯集』及び宋刻小字本『說文』有り。來札に云ふ、『王右丞文集』は即ち所謂の『山中一半雨』本。『許丁卯集』は即ち所謂の『較宋版多詩幾大半（宋版に較ぶるに詩多きこと幾ど大半の）本なり』と。見るべし、心を留め搜（蒐）訪し、竟に也是翁の書（清の錢遵王の『讀書敏求記』を熟讀し以て左券と爲し、而して余が託に負かざるを。惜しむらくは物主の奇に居るを以て、必ず『說文』と並び售らんとし、値（直）白金百二を索む。而れども余は又た『說文』は已に一部を置くを以て、復た重出せず。書を作り之に復し、許すに二十六金を以てし、此の兩書を得んとす。札の往返再三にして、竟に能く願ひの如くす。特だに余の書を得るの福に幸ひするのみならず、亦た重く余が友の購書の力に感ずるなり。此の書の「山中一半の雨」に作るの本、尚ほ劉須溪評點の元刻を見るも、止だ詩六卷のみ。周香巖家（周錫瓚）に藏せらる。香巖又た何義門の校宋本を藏す。亦た止だ詩のみにして文無し。同じく傳是樓（清の徐乾學）に出づると雖も、而れども紋次紊亂し、字句同じからず、一本に非ず。十月十三日、毛二榕坪並びに余の爲に言ふ、向に桐郷の全（金）氏（金德興）の本を見るに、板刻差大にして、詩中亦た「山中一半の雨」に作る

も、文は則ち有ること無きなり、と。此れと更に一本に非ず。益ますます 此の刻の最善なるを見る。而して余の所藏、抑も或いは（何ぞ）幸ひなるか。客去り書を携へ架に挿し、即ち數語を尾に跋す。堯圃黃丕烈識す。

嘉慶癸酉（十八年、一八一三）中秋の後八日、偶五柳居（陶珠琳）に過ぎり、新たに無錫の人より元刻の劉須溪評點『王右丞詩』を買得たるを知り、即ち借り歸りて宋刻と對す。其の序次悉く同じ。之を購はんと擬するも、未だ許すや否やを知らざるなり。廿四日、復翁記す。

#### 古靈先生文集二十五卷<sup>(24)</sup>

宋の贛州刊本、元修本。每半葉十行、大小均しく十八字。左右雙邊。前に目錄二十三葉有り。李（李綱）序を補鈔す。每卷、分目有りて、正文に接す。首行「古靈先生文集卷第幾」と題す。尾同じくして、隔つること數行不等。卷末に行狀・誌銘等六篇及び神宗即位便遼語錄を附す。板上に字數を紀し、魚尾の下「古靈集幾」、下魚尾の下に葉數並びに刻工姓名を紀し、「魏」「葛文」「楊享」「君」「黃太」「盧老」等の如し。宋諱は、「玄」「畜」「泣」「恒」「耿」「徵」「讓」「樹」「桓」「媯」「慎」「敦」「擴」「馴」等の字を避く。跋並びに「吳騫拜經樓」「吳氏藏書」「甲」「宋本」「事學鍾離存義槧書求宛委續餘編」「公孫翰題印長壽」「小桐谿上人家」「天水」「露鈔雪購」「鶴安校勘祕籍」「俱に篆書朱文」の諸記有り。跋有り。

是の書の缺筆に「擴」字有り。當に是れ理宗以後の刊なるべし【宋

本に改められたるに往往此れ有り。字畫適勁。是れ南宋槧本の致精なる者。目錄第四に「贈剡縣過項祕丞」有りて、「項（神宗の諱）」字は缺筆の書に作らず、竟に「神宗廟諱」の四字に作る。是れ稿本の原文に據るなり。

殘本周益文忠公集四十冊<sup>26</sup>

宋寧宗以後の刊本。每半葉十行、大小俱に十六字。左右雙邊。『省齋文藁』の目錄兩冊、卷一より卷八に至るまで、卷二十八より卷三十六に至るまで、『平園續藁』の序【徐誼】目、卷一より卷十五に至るまで、卷二十<sup>27</sup>より卷三十に至るまで、卷三十六より卷四十に至るまで、『玉堂類藁』の卷六より卷八に至るまで、卷十一より卷十三に至るまで、『歷官表奏』の目錄二十六葉、卷一より卷五に至るまで、卷十より卷十二に至るまで、『承明集』の目錄兩葉、卷一より卷六に至るまで、『書稿』の卷五、卷九より卷十一に至るまで、「附錄」五卷【前缺八葉】、共に七十卷を存す。毎卷の首行、類目は上に在り、總目は下に在り。「省齋文藁卷第一」■（空二格）周益文忠公集一」の類の如し。卷尾の題は首行に同じ。板心の上に字數を紀し、魚尾の下に「某種幾」、下魚尾の下に葉數並びに刻姓名を紀す。「胡昌」「胡彥」「鄧振昌」「胡元」「蔡懋」「恩懋」「劉宗」等の如し。宋諱は、「懋」「徵」「樹」「慎」「廓」等の字を避く。汪士鍾の「汪士鍾印」「三十五峰園主人」「趙宋本」の諸記有り。

慶元條法事類三十六卷<sup>28</sup>

抄本。余、清季に法律館に提調するの時に於いて、曾て罍里（江蘇省常熟市）の瞿氏（鐵琴銅劍樓主の瞿啓中）藏する明抄本を借録し、諸を劄刷に附すも、改革に値ふに因りて、中ごろに輟め今に至り、懐に耿耿たり（氣に掛かる）。此の間に亦た是の書有り。疑ふらくは亦た瞿氏本より出づるならん。卷首に提要一則有り。何人の作る所なるかを知らざるも之を存す<sup>29</sup>

慶元條法事類八十卷、首卷缺佚し、未だ撰人の姓氏を詳らかにせず。『直齋書錄解題』（南宋の陳振孫の撰）に據るに、「嘉泰條法事類八十卷、宰相の天台の謝深甫子肅等、嘉泰二年、表し上る」と有れば、則ち此れ謝深甫の監脩（修）の書爲ること疑ふべき者無し。振孫又た云ふ、「初め吏部七司に『條法總類』有り。『淳熙新書』既に成り、孝宗詔して七司體に倣ひ、分門修纂して、別に一書を爲り、事類を以て名と爲さしむ。是に至り『慶元新書』を以て修定頒降し、檢閱に便を得しむ」と。蓋し其の詔を奉ずるの時を擧ぐれば、則ち慶元と曰ひ、而して其の成書の日に据れば、則ち嘉泰と曰ふならん。『宋史』寧宗本紀を攷ふるに、慶元四年（一一九八）九月丁未、『慶元重脩（修）敕令格式』を頒つ。又た嘉泰二年（一二〇二）八月甲午、謝深甫等『慶元條法事類』を上る。三年七月辛未、『慶元條法事類』を頒つ。史文に据（據）れば、正に當に名づけて慶元と爲すべし。故に『玉海』に「慶元脩敕令格式附條法事類」を載せて云ふ、「嘉泰二年八月二十三日、『慶元條法事類』四百三十七卷を上る。書目に云ふ八十卷」と。其の云ふ所の「書目」なる者は、『館閣書目』なり。然らば則ち

八十卷なる者は、又た原脩（修）の書に非ず。陳氏の改めて嘉泰と爲すは、其の中、故無き能はざるに似たり。其の一書と爲すに至りては、則ち固より疑ふべき無し。其の闕卷は、卷一、卷二及び卷三首數葉、卷十八より二十七に至るまで、卷三十三より三十五に至るまで、卷三十八より四十六に至るまで、卷五十三より七十二に至るまで、凡そ四十二卷<sup>(30)</sup>。然れども一代の典制、頼りて以て考ふべき者尙ほ多し。『玉海』載す「建隆考課令」の如きは、四善四最有りて、而れども四最は僅かに其の三有るのみ。『事類』に據れば、則ち仍ほ氏籍増益し、丁を進めて老に入るを「生齒之（云）最」と爲すこと有り。其の餘の十科の薦擧の令の如きは、則ち紹興三年（一一三三）の三省樞密院の請に本づき、復（後）た元祐の司馬光の請ふ所の法を舉行すること、『宋史』選舉志に見ゆ。武臣薦擧の格は、則ち之を隆興元年（一一六三）正月一日の三省樞密院の奏する所に本づくこと、『玉海』銓選類に見ゆ。蓋し沿革損益、時に差池有りと雖も、而れども宏綱細目は、正に復た脈縷、之を尋ね存すべし。自づから以て史志の闕に裨するに足る。其の卷尾に『開禧重脩（修）尙書吏部侍郎右選格』二卷を附するに至りては、倫ならざるに似ると雖も、然れども葉盛の『某竹堂書目』政事類<sup>(31)</sup>を攷ふるに、『開禧吏部七司法』二十冊、『慶元條法事類』三十冊有れば、則ち兩書は原自づから統行す。故に寧宗本紀に「慶元二年十一月乙巳、『吏部七司法』を重修せしむ」、「開禧元年六月己巳、陳自強等、『新脩（修）淳熙以後吏部七司法』を上る」、「開禧二年三月甲午、『開禧重脩（修）七司法』を頒つ」

と。紀の言ふ所の如くんば、則ち此の二卷は、又た陳自強の上る所の『吏部七司法』爲り。『直齋書錄解題』亦た「嘉定吏部條法總類」と名づく。因りて『四庫全書』の『乾道臨安志』を收むるの例に仿ひ、之を著して以て其の書の匡略を見すと云ふ。

(1) 昶宋樓などに收藏した清の陸心源舊藏書の購入価格は、董康が刊行した島田翰『昶宋樓藏書源流攷』によれば、「値を需むること甚だ昂く、始め五十萬兩と號し、次に三十五萬圓と稱し、後に稍減退して二十五萬圓に至る。……遂に訂議して十萬圓と爲す」とある。また『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』（靜嘉堂文庫、平成四年四月、解題篇頁一三八）の米山寅太郎「靜嘉堂文庫の沿革」には、「代價は、初め樹藩（筆者注：陸心源の長子）が五十萬元を求めたが遞減し、結局十二萬圓であった」とある。なお、その數は「四一七二部 四三九九六冊」（同書頁一三六）であり、靜嘉堂文庫の漢籍收藏を大いに充實させた。

(2) 長澤規矩也氏は、大正十五年六月から昭和十四年四月まで靜嘉堂文庫の囑託の任にあつた（長澤規矩也著『古書のはなし―書誌學入門―』、富山房、昭和五十六年六月再訂、頁一六三・一七〇）。

(3) 本書は宋代の歴史書。本版は、『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』（本文前掲）圖版篇の頁八四―八六に書影が掲載され、解題篇の頁二四・二五に書名を「皇朝編年綱目備要」として著録される。解題篇は、「宋九朝編年備要」の別書名を挙げ、「三〇卷首目一卷 宋陳均撰 南宋末刊（抄補）三〇冊」と記す。重要文化財指定。昭和十一年に『靜嘉堂秘笈』の一つとして影印出版され（解題は長澤規矩也氏の撰、後に『長澤規矩也著作集』第九卷、汲古書院、一九八五年二月、頁四〇八・四〇九収録、再複製本もある（韓國釜山市、必峰文化社、一九九二年二月）。尾崎康氏「日本現存宋元版解題史部（上）」（『斯道文庫論集』第二七號、一九九二年、頁二五四・二五五）にも解説がある。また陸心源の『昶宋樓藏書志』（以下、陸志と略稱）卷二一・『儀顧堂題跋』（以下、陸跋と略稱）卷三「宋版宋朝編年綱目備要跋」参照。なお上海圖書館所藏の本書の宋版は、董康が「嗣出の者」という重刻の別本に相當し、正文書題を「皇朝編年□□（空三格）備要卷第幾」に作り、小字の行格が二十三字になっている。汪士鍾による卷二十六以下の補抄はこの版本に依據したものである（『上海圖書館藏宋本圖錄』上海古籍出版社、二〇一〇年九月、頁一九〇）。上海圖書館本は「中

- 華再造善本」の一つとして影印された（北京圖書館出版社、二〇〇四年九月）。
- (4) 二箇所の墨丁は、上には「三」、下には「六」が入る（影印本による）。
- (5) 「毎代の帝王は頂格。干支の紀年は橢圓白文」は正文の形式であって、「目錄」には帝王名が空一格になっており、干支の紀年はない。
- (6) 「中興小曆」と「九朝通略」の配次が誤って前後顛倒している。
- (7) 「毘陵志」は、董康の故郷である江蘇省常州の地方志。本版は『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』圖版の頁一四一―一五一に書影が掲載され、解題篇の頁三三に、「重修毗陵志 存一四卷（卷七一・九二・四） 宋史能の撰 宋咸淳刊 三冊」と著録されている。また尾崎康氏「日本現存宋元版解題史部（下）」（『斯道文庫論集』第二八號、一九九三年、頁四五）にも解説がある。陸志卷三一・陸跋卷四「宋槧咸淳毘陵志跋」参照。なお原本の書名は「毘」を「毗」に作る。
- (8) 『靜嘉堂文庫所藏 宋元版』マイクロフィルム（以下、靜嘉堂マイクロと略稱）によると、以下の四條の題跋は、第一條を除いて第一冊の護葉に録されている。
- (9) この一文は、第二冊の護葉すなわち卷十二本文の前葉に記されたものであるが、『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』解題篇の識語録文の中に見えない。董康の録文には偽脱があって、靜嘉堂マイクロによれば、原本は「板心」を「板數」に作り、「補充」の下は一格を空けて「卷十三缺十三葉樂之屬」に作っている。
- (10) 「趙氏」は清の趙懷玉（一七四七―一八二三）である。靜嘉堂マイクロによれば、原本は「趙氏」ではなく、「趙味辛」に作る。「味辛」は懷玉の別號。彼は嘉慶二十五年（一八二〇）に「重修毘陵志」を重刻した。
- (11) 『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』解題篇によれば、この一文は後掲の跋を記した清の唐翰題の追記であり、「陸氏」すなわち陸心源筆の批（書き入れ）ではない。陸心源の手批は、「第二十卷是第二十四卷剗改存齋（陸心源別號）識」というもので、唐跋「剗去」から「是書」の間の旁らに書き込まれている。
- (12) 靜嘉堂マイクロによれば、「翰」字下の墨丁は「題」字とすべきである。また尾崎康氏「日本現存宋元版解題史部（下）」によれば、「丁卯」は同治六年（一八六七）に當たる。唐翰題は、清の藏書家で嘉興（浙江省）の人、字を蕉安、また鴈安という。
- (13) 靜嘉堂マイクロによれば、「淳熙十四年（一一八七）」は誤記で、「淳熙十五（一一八八）」が正しい。また董康は「卷九に在り」と誤って注記にし、この跋が卷九に書き入れられているという誤解を與える。原文は「見卷九」と記しており、鄒補之の州學教授の官歴が『重修毘陵志』の卷九に見えることが分かる。
- (14) 本版は『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』圖版の頁一二三に書影が掲載され、解題篇の頁三五に「武經七書 二五卷 南宋刊 六冊」と著録されている。民國二十四年（一九三五）商務印書館から『續古逸叢書』の一つとして影印され、後に『四部叢刊續編』（臺灣商務印書館、一九六六年）にも収録された。陸志卷四二（各書分出著録）・陸跋卷六「宋刊武經七書跋」参照。
- (15) 刻工名は影印本で確認して補訂した。董康が列記したうち『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』解題篇に見えるのは「金嵩」だけである。
- (16) 『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』解題篇は「禮部尙書」とする。
- (17) 本版は「詩仙」として知られる李白の最古の詩集であり、『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』圖版の頁二一〇・二一一に書影が掲載され、解題篇の頁五九に「李太白文集 三〇卷首目一卷 唐李白撰 南宋初期刊 一二冊」と著録されている。重要文化財指定。一九五八年一〇月に京都大學人文科學研究所から『唐代研究のしおり』第九『李白の作品』として縮小影印された。また二〇〇六年二月に汲古書院から『古典研究會叢書 漢籍之部』の一つとして米山寅太郎・高橋智の兩氏による解題を附して影印された。陸志卷六八・儀顧堂集』卷二〇「北宋本李太白文集跋」参照。
- (18) 『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』解題篇は、なお「構」（南宋初代高宗の諱）「搆」の避諱字も擧げる。
- (19) 本版は『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』圖版の頁二一五・二一六に書影が掲載され、解題篇の頁六〇に「王右丞文集 一〇卷 唐王維撰 南宋初期刊 二冊」と著録されている。重要文化財指定。靜嘉堂文庫稀觀書之七として影印され（靜嘉堂文庫、一九七七年七月）、また『古典研究會叢書 漢籍之部』（米山寅太郎解題、高橋智注）にも影印出版された（汲古書院、二〇〇五年九月）。陸志卷六八・陸跋卷一〇「宋本王右丞集跋」参照。なお「右丞」は撰者である唐の山水詩人の王維の官名（尙書右丞）。
- (20) 『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』解題篇と影印本の言と、「張■私印」の墨丁は「欽」（張欽は明人、「省■」のは「莫」）である。ただし後者は『古典研究會叢書 漢籍之部』の高橋智氏の解題注（頁三五四）は「芸艸」とする。
- (21) 「遼」は衍字。また「宋刻之」の下に「誤」字を脱している。
- (22) 「所謂の……」は、錢曾『讀書敏求記』卷四に見える「許渾丁卯集二卷」の「元刻増廣」本に關する語からの引用。
- (23) この黃丕烈識語の原文には「毛二榕坪」の下に、「過訪士禮居。余知其能識古書、出此相質、榕坪（士禮居を過訪す。余其の能く古書を識るを知

り、此を出だして相質ぬ。榕坪」の十八字がある。移録を誤った脱文であらう。

(24) 本版は「靜嘉堂文庫宋元版圖録」図版篇の頁二二六・二二七に書影が掲載され、解題篇の頁六三に「古靈先生文集 二五卷附一卷 宋陳襄撰南宋末刊元修 一二冊」と著録される。陸志卷七四・陸跋卷一〇「宋本陳古靈跋」参照。著者の陳襄は北宋の思想家。

(25) 『靜嘉堂文庫宋元版圖録』解題篇によれば、二字の墨丁は「質肅」とすべきである。

(26) 本版は、『靜嘉堂文庫宋元版圖録』圖版篇の頁二二一・二二二に書影が掲載され、解題篇の頁六四に「周益文忠公集 存七〇卷 宋周必大撰 南宋刊 四〇冊」と著録される。南宋の剛正な政治家でもあった周必大の詩文集で、もと全二〇〇巻あるうちの殘缺本。殘存部分には缺葉がみられる巻もある。陸志卷八五「周益文忠公集殘本」・陸跋卷一二「宋槧周益公集跋」参照。

(27) 靜嘉堂マイクロにより「七」字を補った。「卷二十」であると、殘存七七巻になる。

(28) 本書は南宋時代に分類編纂された法令集で、法制史研究の重要資料。『靜嘉堂文庫漢籍分類目錄』頁三六八には「慶元條法事類 殘存三六卷附開禧重修尚書吏部侍郎右選格二卷 撰者未詳 寫 三〇〔冊〕」として著録。一九六八年一月に古典研究会から、長澤規矩也・中島敏爾氏の解題と吉田寅氏の「對校表」を附して影印出版された。陸志卷三五・陸跋卷四「慶元條法事類」跋参照。

(29) 董康は以下に移録する「提要一則」を「何人の作る所なるかを知らず」というが、實は清の張鑑『冬青館集』乙集卷六の「慶元條法事類跋」である。『書舶庸譚』の録文には、本来、文頭にある「慶元條法事類八十卷」から「初吏部七司有條法總類」に至る八十字を「開禧吏部七司法二十冊」の後に置く錯簡があり、またこの「二十冊」の下に「慶元條法事類三」の七字を脱する。文意が通じないので、この譯注では影印本の「提要」の文に従い訂正し、『書舶庸譚』の異文を括弧に注記した。なお『冬青館集』の文とも異同が見られ、文末に近い箇所「嘉定吏部條法總類」の下における「兩書在當時本自竝行未可知也」の十三字はその顯著なものである。

(30) 卷三を除いて缺巻を合計すると四十四巻になる。靜嘉堂本の存巻の「三十六巻」と合算すれば、「慶元條法事類八十巻」の原巻數になる。「四十二」は筆誤であらう（『冬青館集』同じく誤る）。

(31) 葉盛『棗竹堂書目』に「政事類」はなく、また以下の『開禧吏部七司法』二十冊、『慶元條法事類』十冊」の兩書も見えない。この兩書は『文淵閣

書目』政書に竝んで著録されている（讀畫齋叢書本卷一四・四庫全書本卷三二）。「葉盛棗竹堂書目政事類」は『文淵閣書目政書』に訂正すべきである。

## 八日

晴れ。長澤が来る。私たちと東方（文化學院東京）研究所に服部（宇之吉）を訪ね、仁井田（陞）にも會う。十一時、東洋文庫に行き、白鳥（庫吉）・岩丹（岩井）〔大慧〕の兩君に會う。藏書目錄を一冊贈呈される。かねてより『明實錄』が日本に三部あり、當文庫が一部所藏していると聞いていた。そこで閲覽を請求したところ、明抄本ながら、中に缺佚が多く、そのうえ世宗の一代がなかった。その他の書籍には善本が多い。すぐに食堂で晝食。四時に長澤と別れて宿に戻る。晩に田中が來談、また贈り物をくれる。

## 詩人玉屑二十二（一）卷<sup>〔1〕</sup>

五山覆元本。每半葉十一行、行ごとに二十一字。前に淳祐甲辰（四年、一二四四）長至日（冬至、陽曆十二月十四日）、玉林黃易（昇叔賜（賜）の序有り。次に目錄三葉、「詩人玉屑門目」と題し、每半葉五行、兩排に分かつ。每卷首行「詩人玉屑卷幾」と題し、尾も同じくして末行に在り。類目は兩行を占め、低二格。上下黒口、魚尾の下「玉幾」、或いは「玉屑幾」、或いは字無し。目は「玉屑目」、序は「玉屑序」。下魚尾の上に葉數を紀す。末に書題の後に於いて題識を刊して云ふ、【空二格】本云ふ、【空四格】茲の書一部、批點句讀畢る。胸臆の決、錯謬多からん。後學の君子、之を正さんことを望むのみ。【下

【復た提行】正中改元（一三二四） 騰月（十二月） 下澣（下旬）、【約空三字】洗心子【空一字】玄惠（玄惠法院 誌す）と。按ずるに、是の書は明清均しく刻本有りて、板式同じ。余曾て此の本を以て對勘するに、約缺くること三十餘葉。凡そ脱葉の處、俱に數字を改易し之を連屬す。讀者覺る罔し。世に五山の據る所は佳本多しと稱するは信に然り。

冷齋夜話十卷<sup>(3)</sup>

五山本。每半葉九行、行ごとに十八字。凡そ九十二葉。前に目錄十葉有り。每卷首行「冷齋夜話卷之幾」と題し、尾も同じくして隔つること數行不等。魚尾の下は僅かに「夜話」。昔年、余は是の書を藏有するも、今は沅叔同年（傳增湘）に歸す。通行本に較ぶるに數則多きなり。

文選六臣註六十卷<sup>(4)</sup>

宋槧初印本。每半葉十行、行ごとに大二十一字、小三十字。四圍雙邊。前に「李善上文選注表」「進集注文選表」「梁昭明太子文選序」有り。每卷「文選卷第幾」と題し、尾も同じ【卷五十九の後は題尾無し】。板心の魚尾下「文選幾」、下に刻工姓名有りて、「陳文重刊」「陳高重刀」「王進重刊」「潘二（与）權重刊」「施蘊」「方祐重刀」「洪乘重刀」「俞珍」「洪重（昌）」「江政乘（重）刀」「洪茂重刀」「忠」「楊昌重刊」「陳才重刊」の如し。卷六十末第七行、低三格にて下の題字八行有り。「右文選の板、歲久しくして漫滅すること殆ど甚だし。紹

興ノ二十八年（一一五八）冬十月、ノ直閣趙公是の邦に來り鎮し、車より下るるの初め、ノ儒雅を以て吏事を飾り、修正を加ふること有り。ノ字畫之が爲に一新し、學ぶ者をして卷を開いて魯魚亥（三）豕の訛りを免れしむ。且つ斯文を無窮に垂れんと欲すノと云ふ。右迪功郎明州司法參軍兼監盧欽謹みて書す<sup>(6)</sup>。

歷代地理指掌圖<sup>(7)</sup>

宋槧。每半葉十四行、行ごとに大二十八字、小三十九字。左右雙邊、圖は四圍雙邊。前に眉山の蘇軾の序有り。次に目錄、三排に分ち十五行。凡そ圖四十六葉。題跋有り、下方及び左右に紀すこと等しからず。總論二葉。魚尾の下僅かに「指掌」の二字。末葉の末行に「西川成都府市西俞家印【「印」字の末直長にして二格を占め、波撇して左に向かふ】」と題す。

樂善錄十卷<sup>(8)</sup>

宋槧。每半葉九行、行ごとに十八字。補抄一葉。前に隆興甲申（二年、一一六四）七夕日の蒙埜何榮孫の序、隆興二年十月日の陳郡の胡晉臣の跋、淳熙二年（一一七五）正月初三日の李石の詩、紹定二年（一二二九）三月望日の郡人趙汝譔の識語有り。葉數を檢査するに、卷一は十四葉、卷二は十五葉、卷三は十四葉、卷四は十八葉、卷五は十六葉、卷六は廿三葉、卷七は十七葉、卷八は廿七葉、卷九は十八葉、卷十は廿二葉。俱に補鈔。每卷首行「樂善錄卷幾」と題す。尾も同じくして隔つること數行不等。次行「李昌齡編」と題し、姓及び名の下の

は均しく空格。下は空二格。魚尾の下に書名を記す。此の書の録する所の故事、盡くは勸戒に限らず。『稗海』本は僅かに三分の一のみ。誠に人を驚かしむる秘笈なり。

- (1) 本書は南宋末の魏慶之が編した詩話の集成書。本版は、『漢籍分類目錄 集部 東洋文庫之部』(財團法人東洋文庫、一九六七年三月)頁一一八に「詩人玉屑二十一卷 宋魏慶之撰 正中元年跋刊本 岩(岩崎文庫)一〇(冊)二一B—d—9」と著録され、『岩崎文庫貴重書書誌解題I』(財團法人東洋文庫、一九九〇年三月)に書影(頁六一)と解題(頁六四)が掲載されている。住吉朋彦氏の『詩人玉屑』版本考(『斯道文庫論集』第四七輯、二〇一三年二月)は本書の書誌研究として精確を極める。
- (2) 前注所掲の住吉氏論文によれば、明版二十二卷本は每半葉十行で行二十一文字、明の胡文煥「格致叢書」本は每半葉十行で行二十字、明の謝天瑞校の二十卷本は每半葉十行で行二十二字という、本版の「每半葉十一行、行ごとに二十一文字」とは異なる板式のものがある。
- (3) 本書は北宋の禪僧、慧洪の雜筆。本版は『岩崎文庫貴重書書誌解題I』に書影(頁一〇一)と解題(頁一一八)が掲載され、後者に「二B—F5(正しくはd23) 冷齋夜話 十卷 宋釋慧洪撰 「南北朝」刊 大一冊」と著録され、巻末に補齊された本版の底本たる宋刊本の原刊記を移録している。
- (4) 本版は『漢籍分類目錄 集部 東洋文庫之部』に未著録。東洋文庫の「漢籍統合データベース」によると、「(請求番號)貴重書X11—6—C—1(書名・卷數) 文選六臣注(編著者) 唐李善等注(出版事項) 紹興中明州刊本(冊數) 32冊」と著録される。
- (5) 本版はいわゆる南宋紹興の明州刊本の六臣注『文選』とされる。阿部隆一氏の『増訂中國訪書志』(汲古書院、一九八三年三月、頁二八—二九二)は、刻工の調査、その年代検討の結果、金澤文庫書藏足利學校遺蹟圖書館現藏本が原刻早印本であって、他の本は修補本であることを解明している。
- (6) 刻工名と卷六十末の刊記の録文に誤字があるので、『増訂中國訪書志』および「宮内廳書陵部收藏漢籍集覽」の宋版明州刊本『文選』の影像(刊記は岩崎家すなわち東洋文庫本による補鈔)によって訂正した文字を括弧に示した。なお「修正を加ふること有り」の「有」字は「首」字が正しく、この一句は「首に修正を加ふ」と訓むべきである。

- (7) 本版は『東洋文庫所藏漢籍分類目錄 史部』(財團法人東洋文庫、一九八六年一月、頁三七九)に「歴代地理指掌圖不分卷 宋闕名撰 宋刊本 一(冊) X11—1—3」と著録される。
- (8) 本書は北宋の李昌齡が編した勸善懲惡に關する古今の逸話集である。本版は『東洋文庫所藏漢籍分類目錄 子部』(財團法人東洋文庫、一九九三年四月、頁一〇四)に「樂善錄十卷 宋李昌齡輯 宋紹定二年新安汪統于會稽郡齋刊本 岩(岩崎文庫)五(冊) X11—1—7」と著録される。重要文化財指定。かつて上海の商務印書館から民國二十四年(一九三五)に「續古逸叢書」の一つとして影印され、また近年「東洋文庫善本叢書3」として原色原寸で覆製出版された(勉誠出版、二〇一四年一〇月)。

## 九日

晴れ。九時、勝山(岳陽)が私たちを伴い、中村不折翁を訪問。翁は書畫をもって一時、傑出した。明治神宮の壁畫はすべて彼の構成になる<sup>(1)</sup>。普段から金石を命のように愛しており、揮毫による収入は、おおむね收藏のための備えにしている。三十年の努力を積み、すでに藏品は百萬點以上に達した。この日、最近に患った病氣が癒えて私達の來訪を聞き、大喜びの出迎えであった。入室して久方ぶりの挨拶を済ませた後、案内されて所藏を観る。一階はみな碑石・墓誌・磚瓦類の物品である。例えば「司馬昇墓誌」は、端(端方)氏からの購入品である。また漢代の一斷碑は、中央に一つ孔があり、他の碑石の臺座に用いたものであろう<sup>(2)</sup>。文字は「禮器(碑)」によく似ている。二階は青銅器・古錢・古印・古鏡の類を陳列している。記憶にのこる品が多い。繼承者がいないので、東洋文庫の例にならない、財團法人にしたことである。人々の力をかりて保存すれば、翁の名前と古文物がともに末永くいきづく。しばらくして別れる。漢碑の寫真と古鏡の

拓本をそれぞれ一點もらう。文求堂に行き、田中と公使館に赴き、蔣「作賓」公使と會う。斯文會に赴き、名刺を置いて別れの意を表す。ついでに明治大學に行き志田「鉀太郎」を訪ねるが、用務のため南京に行っていた。岡田「朝太郎」は葉山に出かけてまだ來校していなかった。

晩に田中夫妻が送別に來る。また私の代わりに揃い本の『大日本史』三百九十七巻を購入してくれた。徳川家の刻本である。「本紀」は權中納言從三位源光圀の修、「志」「表」は七代の孫の權中納言從三位齊昭の補。およそ「本紀」七十三巻。「列傳」一百七十巻、うち「后妃」十二巻【一から十二】、「皇子」十四巻【十三から二十六】、「皇女」六巻【二十七から三十二】、「諸臣無稱謂者」七十三巻【三十三から一百五】、「將軍」八巻【一百六から一百十三】、「將軍家族」四巻【一百十四から一百十七】、「將軍家臣」二十二巻【一百十八から一百三十九】、「文學」五巻【一百四十から一百四十四】、「歌人」四巻【一百四十五から一百四十八】、「孝子」一巻【一百四十九】、「義烈」一巻【一百五十】、「列女」一巻【一百五十一】、「隱逸」一巻【一百五十二】、「方技」一巻【一百五十三】、「叛臣」四巻【一百五十四から一百五十七】、「逆臣」一巻【一百五十八】、「諸藩」十二巻【一百五十九から一百七十】。「志」一百二十六巻、うち「神祇」二十三巻【一から二十三】、「民族」十三巻【二十四から三十六】、「職官」五巻【三十七から四十一】、「國郡」三十三巻【四十二から七十四】、「食貨」十六巻【七十五から九十】、「禮樂」十六巻【九十一から一百六】、「兵」六巻【一百七から一百十二】、「刑法」二巻【一百十三から一百十四】、「陰陽」六巻【一百十五から

一百二十】、「佛事」六巻【一百十一から一百二十六】。「表」二十八巻、うち「臣連二造」二巻【一と二】、「公卿」七巻【三から九】、「國郡司」十二巻【十から二十一】、「藏人檢非違使」四巻【二十二から二十五】、「將軍僚屬」三巻【二十六から二十八】。後に「徳川家藏版」印【篆書朱文】があり、明治初年に印刷されたものである。日本の古史で『四庫存目』と『曝書亭文集』に見えるのは唯一『吾妻鏡』である。日本の歴史に屬するが、おおむね漢字で當地の言葉を表記しており、難澁難解である。この書は『史記』『漢書』以來の傳統の規範をゆたかに備えている。通行本はわずかに二百四十三巻で、「紀」「傳」の部分だけのものである。「志」「表」を附しているものは、なかなか買えない。田中に依頼して探求すること十年にして、今やっと入手でき、とてもうれしい。二時間ほど暢談し、ようやく別れる。

(1) 原文「明治神宮之壁畫皆其結構」。「明治神宮之壁畫」は明治神宮の聖徳記念繪畫館にある明治天皇の業績を畫いた繪畫群をさす。中村不折は大正十二年(一九二三)に壁畫専門委員會の一員として加わり「日露役日本海海戰」を制作したが(林陽子「明治神宮聖徳記念繪畫館について」、「明治聖徳記念學會紀要」復刊第一號、一九九四年六月による)、董康が「皆其結構」というのは正しくない。

(2) この碑石は、中村不折が『法帖書論集』の一つ『漢碑之研究』下(雄山閣、昭和十年七月、口繪、頁八〇)に、「縱二尺、横二尺二寸五分、厚さは五寸の斷石である。中央に長方形の穴を穿たれて何にかに利用したらしい、……字體は魯峻と張遷の間にありて波磔の少ないものであるが、風神古樸規模雄偉の字體である。此の日碑は昨秋渡來したもので、我が國では漢碑の渡來するものを以て始めとする」と紹介した「冢土斷碑」であろう。この碑は、「處士高殘碑」とも呼ばれ、中村不折の舊藏品を収める書道博物館に現藏される。

(3) 「禮器碑」は後漢の永壽二年(156)に刻された八分體の隸書による

石碑。

## 十日

晴れ。午後十二時、「陶」心如と岡田の宴に行く。参加者は中日の著名人四十名。蔣公使および「孫」伯醇・「楊」雪倫も座にあった。二時に宿に戻る。田中・勝山・高錫昌・張莊伯が先に來ていた。三時に宿を發ち、田中らと東京驛に向かう。仁井田・見尾・田島・堂野前が相繼いでやってくる。田中は、乾郎にわれわれの伴をして熱海まで送らせる。約十分経ってから諸氏と握手して別れる。五時過ぎ、小田原に着き下車。自動車に乗り換え、四十分ほどで底倉〔温泉〕に着き、葛屋に宿をとる。「葛」の字は、日本讀みすると「津田」と同じ。思うに、「津田」の書き換えであろう。この旅館は山に沿って建築されている。私達は四階の部屋。屋外に幾つかの峰が分かれて聳えている。緑が滴るようである。峰は白雲に覆われ、時に隠れたり時に現れたりする。夕暮れになると、あたりに電燈が輝き、その多さは明るい星のようである。山道は車が通行でき、少し商店街がある。動中に静寂を宿し、すこぶる趣に富む。本日は人との應對、あちこちへの移動、そして精神の疲れも加わり、入浴後、枕につくと高野で眠り込んだ。

## 十一日

雨。朝食後、自動車に乗って多くの景勝を巡る。長尾峠の森永茶寮に至って少し休憩。對嶽亭がある。下を見ると白雲が湧き起り、ついに何も見えない。標高が高くて寒いので、長いあいだ留まっていた。

れない気分になる。また乗車し、約十分で湖尻に到着。ディーゼル・エンジン船に乗って湖を渡り、元箱根に着き、陸に上がる。宣統元年（一九〇九）の七月に、富士山から下りてから、御殿場經由馬に乗ってここに來たことを思い出した。當時の湖の往來は粗末な小舟しかなかったが、今では設備が行き届いている。湖畔の茶店で荷物を整えてから、同行の者と箱根神社に參詣。百數十段の階段があつて、登りきつた所に兄弟樹（曾我神社の兄弟杉）がある。觀光客がここに來ると、みな名刺を幹の割れ目に差し込んで名前を書き付ける代わりにしており、遠目にはまるで鱗が生えたように見える。中殿に權現が祀られている。何時の時代の人物かは分からない。あるいは「權時（しばらく）」山の神として奉安されたので、假にその名前に定め、明らかに存在するが如くにして、實はそのような人はいないが、しかし靈驗はあらたかであるといわれている。社殿は震災の被害により、傾いて壊れそうである。目下、再建の設計中で、祭神を左の末社に移していた。人々に隨い參拜し、賽錢を投げ入れてから社殿を出る。社殿の右に體をかめた銅製の鑄物の獅子があつた。立派で大きく生き生きしている。これも數百年前のものである。神社に仕えているのは、みな白い上着に赤い裙（袴）の少女である。どうやら近隣の村々から幼い頃に身を捧げた者のようである。湖畔に官幣小社があつて、もとは關所である。徳川幕府時代に、江戸から京都に入るには、籠に乗らなければならなかった。宿泊場所はすべて五十三。ここは五十三のうちの一つで、關所を設け旅行者を厳しく調べた。「關東」「關西」というが、それは今に至ってもなお、この名稱が習わしとなっているからであり、つまり

〔箱根の關〕は東西の境界地點でもある。祭神は當時の官吏である。十二時、箱根旅館に到着して晝食。遙かに湖心を眺めると、時折、蒸氣が上がるのが見える。その下はまだ火の消えない火山があり、温泉もここに發していると思われる。爆發の危険がなおも心配される。一時半、長距離バスで熱海に向かい、雲霧の中を走行する。我が國の黃山の雲海と比較すると、どちらが壯觀であろうか。この晩は古屋に宿泊する。私は二階の部屋。相模灣の全景が俯瞰できる。夜になって風の音が海の音と交じり、震動が止まない。この世に身を寄せているに過ぎないと深く感じる。

箱根道中口號 箱根道中の口號

〔其一〕 〔其の一〕

歴盡高樓陟盡山 高樓を歴り盡し山を陟り盡す  
山山秀聳軼塵寰 山山秀聳し塵寰に軼す  
屐聲橐囊松聲逸 屐聲は橐囊として松聲は逸なり  
都伴泉聲到枕間 都て泉聲を伴ひ枕間に到る

【鳶屋隨山而升、余居四階。俯視玄關、如在深壑。其上青翠插天、流泉競響、而屐韻松濤、了了可數。動中含有靜機、非塵世人所能領悟（鳶屋、山に隨ひて升り、余は四階に居る。玄關に俯視すれば、深壑に在るが如し。其の上、青翠天に插し、流泉競ひ響きて、屐韻松濤、了了として數ふべし。動中に靜機を含有し、塵世の人の能く領悟する所に非ず）。】

高樓をすべて巡り、山も登り盡くした。どの山も高く抜き出て聳え

立ち人間界から超越している。下駄ががたがたと音を立て松風の聲がのどかに響く。どの音も泉の音と合わさって枕邊に達する。【鳶屋は山の斜面に沿って登った所にあり、私の部屋は四階であった。戸から覗き込むと、まるで深い谷にいるようである。宿の上には木々の緑が天空に挿し入り、流れる泉が競い合うように水音をたて、下駄の鳴る音と波のような松風の響きがはっきりと聞こえる。動中に靜寂に變わる契機が含まれ、これは俗世の人には悟り得るものではない。】

〔其二〕 〔其の二〕

路仿之江任屈旋 路は之江に仿ひ屈旋に任す  
方言合許補陳編 方言合に許すべし陳編を補ふを

遙瞻蒼翠屏風上 遙かに蒼翠を瞻る屏風の上  
馳夢衝雲瞬卅年 夢に馳せ雲を衝き瞬げば卅年

【峠爲天武天皇所製新字、關山徑爲之。字形取其便於升降之義。宣統紀元、余下富士、自御殿場策騎經此、迴溯已三十年矣（峠は天武天皇の製る所の新字と爲し、山徑を關きて之を爲る。字形は其の升降に便なるの義を取る。宣統紀元、余は富士より下り、御殿場より策騎して此を經たり。迴溯すれば已に三十年なり）。】

山道は之江（錢塘江）のように曲がりくねって通じている。「峠の文字は」地方の言葉として古い典籍の補いになるので許容できる。緑の屏風のように廣がる樹林を「峠から」遠く眺めた。夢の中を駆け巡ることく雲霧の中を走行したのは瞬ぐうちに三十年も昔のことになった。【峠】は、天武天皇が作製した新字であり、山道を開いたときに

作った。字形は、山の上り下りに便利であるという意味を象っている。宣統元年に、私は富士山から下り、御殿場から馬に乗ってここを通ったが、思い返せばすでに三十年前のことである。】

〔其三〕

萬松深處殿嵯峨  
殿は嵯峨たり  
舩蠻於今展拜多  
今に舩蠻として展拜多し

縞袂絳裙年十五

縞袂絳裙 年十五

休將巫峽誤神娥

巫峽を將て神娥を誤らしむることを休めよ

數知れない松の木々の奥に高くそびえる神殿が建てられている。今も靈驗があつて參拜者が多い。白絹の上着に赤い袴姿は年の頃十五の乙女である。巫峽の神女傳説をもちだして神に奉仕する美しい彼女らの身を誤らせないようにせよ。

〔其四〕

爲嚴鎖鑰仗丸泥

鎖鑰を嚴にせんが爲に丸泥に仗る

到此平分東與西

此に到りて東と西とを平分す

周道而今歌砥矢

周道 而今 砥矢を歌ふ

無煩食客數鳴雞

食客を煩はして鳴雞を數ぶこと無し

關所の鎖と錠前をしっかりと固めるために後漢の故事にならない泥團子で封ぜられた。ここ箱根の關で東と西に眞半分に分かれる。今や大きな道路は『詩經』に歌われたように砥石の如く平らで、矢の飛ぶように眞っ直ぐに通っている。「江戸時代の關所はなくなり、」函谷の關

の戸を開けるためにわざわざ食客に鶏の鳴き眞似をさせるようなことは無くなった。

〔其五〕

〔其五〕

湖隄小築勝旗亭

湖隄の小築は旗亭に勝る

湖尾山容上下青

湖尾の山容 上下青し

添個採蓮湖上棹

個の採蓮湖上の棹を添ふれば

夢魂無復戀西冷

夢魂 復た西冷を戀ふること無からん

【湖壩有茶亭、一面富士倒影。湖爲諸峰所瀦蓄、其深莫測。不似西湖隨處蓮葉田田也（湖壩に茶亭有りて、富士の倒影に面す。湖は諸峰の瀦蓄する所と爲し、其の深き測ること莫し。西湖の隨處に蓮葉田田たるに似ざるなり）。】

湖堤の側にこぢんまり建てられた茶店は料亭にまさる。湖尻からの富士山は上に見える姿も下に見える湖面の倒影も青々と美しい。湖上に浮かぶ蓮の實採りの舟を一艘ここに加えると、もう西冷橋のある西湖を戀いこがれて夢を見ることはなくなるであろう。【蘆ノ湖】湖畔の空き地に茶店があり、逆さ富士が眞っ正面に見える。湖は周りの峰々から出た水が溜まったもので、測り知れない深さである。西湖のように至るところいっぱい蓮の葉で掩われていない。】

(1) 「新字」は、天武天皇が臣下に作らせた國字（訓讀みのみに用いる和製の漢字）であり、また『日本書紀』卷二九（天武天皇十一年、六八四）にいう天武天皇が編纂させた國字を収録した四十四卷の佚傳の字書とされる。新井白石の『同文通考』の卷二「新字」に『日本書紀』を據り所とし

て論じ、また卷四「國字」に「峠」など當該の八十一字を解釋している。「山徑を闢きて」、峠の字を作ったということは未詳。

(2) 「胖蠻」は靈氣が行きわたること、またその様子。唐の楊炯「少室山少姨廟碑」に「騁神變而揮霍、降精靈而胖蠻（神變を騁せて揮霍とし、精靈を降して胖蠻たり）」とある。ここでは靈驗あらたかなことをいうと解した。

(3) この句は、巫峽の神女にまつわる戰國楚の宋玉の作品「神女賦」を典故に用いたもの。中國の巫峽に神女がいるように、蘆湖湖畔の箱根神社に神に奉仕する美女が必要だとして村の娘を幼いころから束縛し、無残な目に遇わせないようにせよという意（本日條の本文「神に仕えているのは……」参照）。

(4) 「丸泥」は、關所の閉まりを固める泥の團子。後漢時代、東から攻め寄せる劉秀を防ぐ策として、王元が函谷關を泥の團子で封鎖することを説いた故事（『後漢書』隗囂傳）による。

(5) この句は『詩經』小雅「大東」の「周道如砥、其直如矢（周道は砥の如く、其の直きこと矢の如し）」を典故に用いたもの。「周道」は「周の東西の幹線道路」（白川靜『詩經雅頌1』、平凡社「東洋文庫」六三五、一九九八年六月、頁二二八）。

(6) 「食客數鳴雞」は、戰國時代、齊の孟嘗君が秦から夜半に脱出する時、彼の食客が夜明けを告げる鶏の鳴き真似をして函谷關が開き、追捕の難を逃れた故事（『史記』孟嘗君列傳）による。

(7) 「棹」は舟をこぐ竿、櫂。また舟をいう。

## 十二日

雨。八時、入浴してから、外に出て散歩する。附近に古刹がある。「清水山」と額に題する。門外の古木は空に届かんばかりに聳え、泉の音が耳に騒がしく聞こえる。門の中を入ると階段があり、それを上る。三十段ばかり。道の傍らに藤原藤原卿お手植えの松があり、高さ數丈、太さは幾人かで抱えるほど。また階段を上ると、左右に楠やら榎などの木があり、どれも數百年ものである。中央に神殿があつて藤原卿を

祀る。左が温泉寺、後が大觀閣。側に明治十二年の石碑があつて、藤原卿五百年忌を記念して立てられたもの。それから海岸を散策。幹のうねった松があり、古びたさまは名狀しがたい。「宮の松」という札が掛けられている。俗に「金色夜叉の松」といい、當地の名勝の一つ。商店がぎっしりと並んでおり、椿油・漆器・竹製品・雁皮紙製品などが名産品といわれている。以前、鐵道は御殿場を經由していたが、今はここ經由に變つた。それで昔よりも數倍の繁盛である。電報局に行き、小林「忠治郎」に電報を打って旅程を知らせる。宿に歸って晝食。十二時十分に熱海驛に行き、乾郎に別れ、下關行き列車に乗って南行し、七時五十分に京都驛に到着。小林父子が出迎え。またも長谷川家（旅館）に宿をとる。

京都寄田中 京都にて田中に寄す

又作樽桑客 又た樽桑の客と作り

逢君鬢未華 君に逢ひて鬢未だ華ならず

鶴梅僂眷屬 鶴梅は僂の眷屬

蟬蠹舊生涯 蟬蠹 舊き生涯

高誼雲天迥 高誼 雲天迥かに

離愁驛路賒 離愁 驛路賒し

雙魚無限思 雙魚 無限の思ひ

殮飯勸常加 殮飯 常に加へんことを勸む

京都から田中（慶太郎）に寄せる

またも日本訪問の旅人となり、あなたとお會いしたが、まだ鬢髪は

白髪交じりになっていなかった。鶴と梅が仙人の家族であったように妻と子供を愛し、紙魚と木食い蟲のついた古書を愛好する生き方を昔から續けておられる。ご高誼にあずかったあなたと雲の浮かぶ天空ほど遙かに別れ、東と西に驛路を遠く距てる別離を悲しんでいます。二匹の魚に托した手紙に盡きせぬ思いを記しました。常々食事を多く攝って健康にお過ごし下さい。

(1)「鶴梅」の句は、北宋の隱士の林和靖が妻子をもたず、梅と鶴を妻や子供のように愛した故事（「梅妻鶴子」）を用いて田中慶太郎の家族愛をいっ

たもの。  
(2)「雙魚」の二句は、「飲馬長城窟行」（『文選』卷二七）の「客從遠方來、遺我雙鯉魚。呼兒烹鯉魚、中有尺素書。長跪讀素書、書中竟如何。上有加餐食、下有長相憶（客の遠方より來たり、我に雙鯉魚を遺る。兒を呼びて鯉魚を烹るに、中に尺素の書有り。長跪して素書を読めば、書中竟に如何。上には餐食を加へよと有り、下には長く相憶ふと有り）」を用いたもの。

### 十三日

晴れ。八時、小林來談。その折りに京都の某舊家の委託賣却書目一冊を取り出す。ひとわたり見て、數點に印をつけ、實物を手にとって見たいと彼に願った。仲介を依頼して上海の某君所藏の『文選集注』を購入することの結果を大阪の某會社に小林が問い合わせた。『文選集注』は、我が國の五代時代の寫本である。六臣以外に、曹憲などの注を合せており、六臣注も通行本に較べて優れている。分卷から計算すると、一百二十卷あったに違いない。<sup>(1)</sup> 森立之の『經籍訪古志』（卷六）に金澤稱名寺に零本が所藏されていると言っている。私は光緒から宣統にかわる頃、島田〔翰〕と出かけて探し出して三十二卷を得た。

内藤〔湖南〕博士にかつて話し、彼から政府に進言し、國寶に加えられた。その頃、我が國の公使館の田〔潛〕參贊が殘本數卷を購入した。私は田君から「誄詞」の一巻（卷一一三。東洋文庫現藏）<sup>(2)</sup> を入手できた。田君は歸國後、すべて琉璃廠の書店の正文齋に賣却した。現在、某君が所藏しているのは正文齋から購入したものである。甲寅（民國三年、一九一四）に私は玉姫を妻に迎えることになったが、嫁入り道具を調える資金がなかったので、『靜志居詩話』にある朱吉〔吉士〕<sup>(3)</sup> が美人の召使いと袁宏『後漢書（紀）』とを交換した故事を逆さまにして、天津の某氏に割愛した。その後、琉璃廠の友人の張月巖がこの一巻を入手し、一萬元の高値で勝山〔岳陽〕に賣却した。學藝界の誰もがこのことを知っている。それゆえ某君は安價で賣ることを承知しないのである。小林が何度も懇請の手紙を出してくれたが、まだ要領を得ない。詳しくいきさつを話し、なおも後々に策を考えてもらうようにした。私達と一緒に嵐山・清水・金閣寺などを遊覽。一休庵〔一久〕<sup>(4)</sup> で晝食をとる。當地の有名な精進料理店で、ちようど上海の功德林のようである。

三時頃、文化研究會（東方文化學院京都研究所）に行き、狩野〔直喜〕を訪問。また倉石〔武四郎〕・吉川〔幸次郎〕に會う。會が所藏する叢書は、すべて蘭泉（陶湘、心如の兄）から讓渡されたものである。<sup>(4)</sup> それゆえ心如とは縁がとりわけ深い。心如を案内して二階に上がり、一つ一つ手で撫でた。陶氏は叢書の蒐集でひところ有名であった。一部一部どれも初印および本が精選され、宋元の古刻を所藏する以外に、獨自の特色を示した。本會で永久に藏儲され得たことは、

蘭泉の二十年間積み重ねた苦心を裏切るものではない。狩野と續編四庫（續修四庫全書）の進行を討論する。この事業は私が提議したこと、本来、編集員に加わっていたが、その才學もないのに學校方面の人員の數に入れられ、兼務する餘裕がないので、福建の黃公渚が博學多識であることから、彼に擔當させるよう推薦した。狩野はこれに贊同した。ついで「内藤」湖南が亡くなったことを話し、彼が遺したものを見てはその死をとくに深く悼んだ。

續いて小林の別荘に行き、御母堂に會う。以前と同様にお元氣であった。晩に小林が陶陶亭で宴會を開いてくれる。北京や天津の風味にとっても似ている。歸途、佐佐木書店（竹苞樓）に行き、紫式部の『源氏物語』を購入。本書は後宮の瑣事を記し、あたかも我が國の『紅樓夢』のようである。残念なことに、當時の方言で書かれており、和學に造詣深いものでないと、その神秘的な境地を味わうことができない。心如は「紅學」を耽愛しており、かつて脂硯齋の第四次改訂本<sup>(5)</sup>を見たことがあり、『脂硯餘聞』の一篇を著した。それで本書は、曹雪芹が一家の榮華を書いたものであることが始めて分かった。通行本の評語では隔靴搔痒の感がある。本日、田中が日本圓二千圓を入金し、程雲岑に渡すよう依頼した。

(1) 『文選集注』の現存本は、かつて『京都帝國大學文學部影印舊鈔本叢書』（一九三五—一九四二）に影印され、その後に見えられたものを増補した『唐鈔文選集注叢存』（周助初編、上海古籍出版社、二〇一一年八月再版増補）に集成されている。

(2) 「正文齋」は譚錫慶が光緒二十五年に開設し、二十餘年間、營業した古

書肆である（孫殿起『琉璃廠小志』、北京古籍出版社、一九八二年九月、頁一一六による）。

(3) 『靜志居詩話』は清初の朱彝尊の著であるが、この故事は現行の『靜志居詩話』には見えず、彼の別の著書『明詩綜』卷八五の「朱大韶婢」の詩に引く「詩話（靜志居詩話）」に見える。明代の藏書家の朱大韶が宋版『後漢紀』を美婢に交換したという逸話。「朱吉」は朱吉士（吉士は官名、庶吉士）の誤り。

(4) 藏書家としての陶湘（一八七〇—一九四〇）については蘇精『近代藏書三十家』（中華書局、二〇〇九年四月）の「陶湘涉園」に詳しい。

(5) 「脂硯齋の第四次改訂本」の『紅樓夢』については、本書卷七・一月十三日條の注參照。

#### 十四日

晴れ。八時に小林が長男と一緒に書籍を運んでくる。二點【書目は後に列記】選び、値段が折り合ったので取り置く。そして我々と一緒に高野山に出かける。路線は全く前年一月十二日と同じにした。極樂橋に到着して、親王院に前もって電話をしておく。自動車に乗り換え、大門まで行く。水原（堯榮）住職が給仕のものを遣わし待たせていた。往年はいつも女人堂から大門を経由したが、今回は初めて徒歩で金堂と「根本」大塔を過ぎる。親王院に着いた頃はすでに十二時をまわっていた。水原に會い、御無沙汰の挨拶を交わす。晝食後、金剛峰寺から井村が使いとして出迎えに来る。井村の父は以前、靈寶館の職員であり、彼とは知り合いであった。<sup>(1)</sup>彼の近況を訊ねると、すでに昨年死去したとのことで、驚きに堪えなかった。井村に付き従い金剛峰寺に行く。水原がすでに先に來ていて、寺僧と我ら客人を柳の間に迎え入れる。新築の部屋の襖には印度の雪山（ヒマラヤ）全山が畫かれており、非常に力強い。一時間ほど談話する。私達に高野山の歴史と寶

物の寫眞帳を贈呈。お別れして、またも井村の付き添いで靈寶館に行  
く。主任の堀田に會う。この人は長く北京にいたので、中國語ができ  
る。新發見の『文館詞林』卷六六六・六六七の二卷を出して見せる。  
長さは七丈餘りあって、箱の中の別紙には「寶壽院」と書いてあるが、  
箱の端には「寶性院」と書いてある。名前の違いを訊ねてみて、元は  
「寶性」であったが、現在では「寶壽」と改まったので、前回に探し  
回れなかったことがようやく分かった。それから奥の院に行き參拜し  
て歸る。水原が晚餐を共にしようと誘ってくれる。自家製の豆腐がと  
ても美味しかった。彼に「白雲山房」「琉璃山房」の二枚の扁額を揮  
毫して記念にする。

#### 『剪燈叢話』十二卷<sup>(2)</sup>

明刻本。未だ編輯姓氏を著はさず。唐以後の各家の小説を曾萃し、  
亦た『青瑣高議』『剪燈新話』の流亞なり。其の詳目を録すること後  
の如し。内に未だ傳本を見ざる有りて、殊に貴ぶべきと爲す。

#### 卷之一

嬌紅記【中州の李詡】 桃帕傳【宋の王右】 玉簫傳【江羣の文  
木】 流紅記【魏陵の張實】 遠烟記【元の劉斧】 賈午傳【唐  
の王彬】 崔護傳【唐の孟啓】

#### 卷之二

博異志【唐の鄭還古】 春夢錄【元の鄭禧】 卻要傳【闕名】  
陶峴傳【唐の司空圖】 狄氏傳【宋の康譽之】 河間傳【唐の柳  
宗元】 滌婦傳【欽の潘之恆】 裴諶傳【闕名】 梁清傳【宋の

劉敬叔】 王魁傳【宋の柳貫】

#### 卷之三

芙蓉屏記【廬陵の李禎】 鞦韆會記【廬陵の李禎】 聯芳樓記【闕  
名】 聚景園記【山陽の瞿祐】 牡丹燈記【元の陳愔】 金鳳釵  
記【元の柳貫】 綠衣人記【元の吾衍】 鬱輪袍傳【唐の鄭還古】  
金縷裙記【丹靑扇記【元の周士】 燕子樓傳【宋の王  
惲】

#### 卷之四

天上玉女記【晉の賈善翔】 太古蠶馬記【吳の張儼】 古墓斑狐  
記【晉の郭頌】 東越祭蛇記【晉の干寶】 秦女賣枕記【晉の干  
寶】 楚王鑄劍記【漢の趙曄】 蘇娥訴冤記【晉の干寶】 夜家  
決賭記【涿州の孫緒】 泰山生令記【晉の司馬彪】 糜生瘞郵  
記【晉の王嘉】 烏衣鬼軍記【晉の李肅】 夏侯鬼語記【晉の孔  
曄】 泰岳府君記【晉の庾翼】 司馬才仲傳【宋の王宇】

#### 卷之五

吳女紫玉記【漢の趙曄】 同昌宮主傳【唐の蘇鶚】 陽羨書生傳  
【唐の鄭還古】 櫻桃青衣傳【唐の任蕃】 震澤龍女傳【唐の薛  
瑩】 彭蠡小龍傳【宋の王惲】 於菟夜兒傳【明の王禮】 度朔  
君別傳【晉の干寶】 山陽死友傳【晉の蔣濟】 華岳神女傳【闕  
名】 嵩岳嫁女記【闕名】 江淮異人錄【宋の吳淑】

#### 卷之六

香車和雪記【廬陵の李禎】 西閣寄梅記【錢唐の瞿祐】 渭塘奇  
遇傳【明の馬龍】 蓮塘二姬傳【元の徐觀】 桃花仕女傳【青門

の沈仕【紅裳女子傳】宋の鄭景璧【南樓美人傳】元の楊維禎  
徐氏洞簫記【長洲の陸】獨孤見夢記【唐の孫頴】王幼玉記  
【洪上の李師尹】趙喜奴傳【闕名】三女星傳【元の吳衍】織  
女星傳【宋の張君房】張女郎傳【元の劉斧】

閩海蠱毒記【宋の楊朮】海外怪洋記【宋の洪芻】寺塔放光記  
【吳郡の王世貞】瓦缶冰花記【宋の何遠】海市奇觀記【明の  
張沂】獨脚五通記【宋の方亮】江南木客記【宋の洪邁】中  
雷神記【宋の何遠】金華神記【宋の崔伯易】猿王神記【宋の  
洪邁】五方神記【楚の柳胡】子姑神傳【宋の蘇軾】紫姑神  
傳【宋の沈括】

卷之七  
章臺柳傳【唐の許堯佐】陳希夷傳【南燕の麗覺】揚州夢傳【唐  
の于鄴】杜子春傳【唐の鄭還古】王渙之傳【唐の薛用弱】  
蔣子文傳【唐の羅鄴】奇男子傳【唐の許棠】黑崑崙傳【唐の  
馮延巳】葦隱娘傳【唐の鄭文寶】董漢女傳【闕名】琵琶婦  
傳【唐の白居易】

卷之十一  
韓仙傳【唐の韓若雲】邢仙傳【宋の王明清】申宗傳【唐の孫  
頴】唐珪傳【明の張孟兼】阿寄傳【錢塘の田汝成】朱冲傳【宋  
の趙彥衛】仙箕傳【宋の周密】杜秋傳【唐の杜牧】妙女傳【唐  
の顧非熊】

卷之八  
烏將軍傳【江瑩】中山狼傳【宋の謝良】義虎傳【吳郡の祝允  
明】人虎傳【唐の李景亮】小蓮記【元の劉斧】獵狐記【唐  
の孫恂】白蛇記【闕名】鸚哥傳【宋の何遠】才鬼記【宋の  
張君房】靈鬼志【唐の荀氏】鬼園記【宋の洪邁】鬼國續記【宋  
の洪邁】

卷之十二  
向氏傳【宋の周密】文捷傳【宋の沈括】  
碁待詔傳【宋の李述】暢純父傳【宋の陸友仁】方萬里傳【宋  
の陳侃】張鋤柄傳【宋の張世南】何簞衣傳【宋の岳珂】王  
實之傳【宋の周密】王玄之傳【莆田の陳音】錢履道傳【睦州  
の陳旺】丁新婦傳【晉の殷基】鍼異人傳【宋の虞防】

卷之九  
大青樓宴記【宋の蔡京】保和曲宴記【宋の蔡京】延福曲宴記  
【宋の李邦彥】廣寒殿記【宣德御製】龍壽丹記【宋の蔡襄】  
遊仙夢記【宋の蘇轍】煮茶夢記【元の楊維禎】巫山夢記【楚  
の宋玉】謝石拆字傳【宋の陳直】鬼靈相墓傳【宋の陳直】  
惠民藥局記【宋の沈括】樂平耕民傳【宋の劉涓】

劍嘯閣批評出像隋史遺文十二卷<sup>5)</sup>  
明の崇禎刻本。撰人の名無し。前に吉衣主人の序有り、殆ど即ち撰  
人ならん。每卷五回、凡そ六十回。毎回の出像の筆墨、精雅絶倫。  
大致『隋唐演義』の隋の部分を取って、並びに其の『隋陽豔史』と重  
複する者を刪る。『演義』を取りて對照すれば、其の刪改の跡を尋ぬ

べきなり。其の目を録すること後の如し。

卷一

第一回

奪嫡を圖りて晉王は功を樹て 亂源を塞ぎて李淵は恨みを惹く

第二回

隋主は讒を信じて太子を廢し 張衡は讖を造りて李淵を危くす

第三回

齊州城の豪傑は身を奮ひ 植樹崗の唐公は盜に遇ふ

第四回

秦叔寶は途次に唐公を救ひ 竇夫人は寺中に世子を生む

第五回

柴公子は劔を舞ひて姻縁を得 秦解頭は文を領して擔閣を喫す

卷二

第六回

蔡太守は時に隨ひて賞罰を行ひ 王小二は面を轉じて炎涼を起こす

第七回

三義坊に簡（武器）を當（質入れ）し腌臢（汚れ）を受け 二賢莊に馬を賣り豪傑を識る

第八回

酒肆に入りて慕にはかに舊識の人に逢ひ 飯錢を還して徑ただちに回郷の路を取る

第九回

魏玄成は留まりて東岳廟に住み 單員外は迎へて二賢莊に往く

第十回

樊建威は雪を冒して行蹤マ（踪）を訪ね 單員外は金を贈り禍水を貽おくる

卷三

第十一回

衆捕人は大いに阜角林きうがうを鬧し 好漢子は縛せられて潞州府に進む

第十二回

罪案を定め發して幽州の地に配せられ 播臺に打ちて名を順義村に揚ぐ

第十三回

張公瑾は二尉遲うぢに轉託し 秦叔寶は羅帥府に解し到る

第十四回

羅夫人は侄を見て傷悲を起こし 羅公子は父を瞞して操演を翫あそぶ

第十五回

勇なる秦瓊は簡を舞ひて三軍を服し 小さき羅成は鷹を射て一弩を助く

卷四

第十六回

羅元帥は書を作り蔡守に貽り 秦叔寶は金を贈り柳氏に報ゆ

第十七回

單雄信は促して秦叔寶を歸らしめ 來総管は遣はして楊越公を賀せしむ

第十八回

齊國遠は嘯きて少華山に聚め 秦叔寶は引きて承福寺に入る

第十九回

柴郡馬は留まりて報徳祠に寓し 陶蒼頭は送りて光泰門に進む

第二十回

收禮官の英雄は氣色を識り 打球場の公子は豪華を逞しくす

卷五

第二十一回

齊國遠は興を漫にして球場に立ち 柴郡馬は伴を挟みて燈市に遊ぶ

第二十二回

長安の婦人は燈を觀て月に歩み 宇文公子は勢に倚り淫を宣ぶ

第二十三回

老婦人は去るを失ひ冤情を訴へ 衆好漢は憤りを抱き義擧を成す

第二十四回

蒸淫を恣にして太子は花に迷ひ 弒逆を躬らして楊廣は位を篡ふ

第二十五回

新皇大いに驕奢を逞しくし 黔首備さに塗毒に遭ふ

卷六

第二十六回

二百里の海山勝景を開き 十六院の嬪御豪華を鬪はず

第二十七回

程咬金は柴扒（竹の熊手）を賣る處無く 尤俊達は銀槓を劫する心有り

第二十八回

長葉林の响馬は自ら名を通じ 齊州城の太守は盜を捕らへんことを請ふ

第二十九回

單雄信は馳せて綠林の箭を送り 程咬金は蹴りて楊木の板を斷つ

第三十回

秦叔寶は官に回りて咎責を受け 賈潤甫は客に接して疑猜を惹く

卷七

第三十一回

程咬金は酒筵にて盜狀を供し 秦叔寶は燭焰もて捕批を燒く

第三十二回

衆豪傑は堂に登り鶴算を祝ひ 老夫人は慶を受け霞觴を飲む

第三十三回

李玄邃（李密）は來總管に關節し 柴嗣昌は劉刺史に請托す

第三十四回

牛家集に努力して奸を除き 睢陽城に直言して忌に觸る

第三十五回

徐世勣は盃酒もて英雄を論じ 秦叔寶は邂逅して異士を得

卷八

第三十六回

隋主遠く影國に征し 郡丞下りて賢豪を禮す

第三十七回

秦叔寶は智もて涙水を取り 來護兒は大いに平壤に戦ふ

第三十八回

宇文述は冤仇に報いんことを計り 來總管は豪傑を援はんことに力む

第三十九回

王薄は衆に倡へて山東に亂し 須陀は一日にして四賊を破る

第四十回

寡衆に敵し濰水に功を成し 客主と作り祝阿に捷を奏す

卷九

第四十一回

楊玄感は諫めに復り成を敗ひ 李玄邃は財を輕んじ禍を脱す

第四十二回

叔寶は計もて密友を全くし 宇文は巧に忠貞を陥る

第四十三回

秦瓊と須陀を雪がんとして密疏を馳せ 秦母と士信を保ち山東に反す

第四十四回

瓦崗寨に雄信は重ねて會し 滎陽郡に須陀は節に死す

第四十五回

須陀を祭り李密に逢ひ 回洛（迴洛城）に戦ひ倉城を取る

卷十

第四十六回

潤甫は巧に仁基を説き 世勣は智もて黎陽を取る

第四十七回

翟讓を殺して魏公（李密）は獨り霸たり 世充を破り叔寶は功を建つ

第四十八回

唐公は晉陽に義を擧げ 李氏は鄆縣に兵を聚む

第四十九回

李密は盟を唐公に結び 叔寶は李靖を救はんことに力む

第五十回

宇文は江都に主を弑し 李密は永濟に麤兵す

卷十一

第五十一回

立命館白川靜記念東洋文字文化研究所紀要 第十一號

世充は擅政して文都を殺し 知節は單騎にして行儼を救ふ

第五十二回

世充は詭計もて魏兵を敗り 玄邃は反覆して熊耳に死す

第五十三回

秦叔寶は主を失ひ鄭に歸し 程知節は計を決し唐に降る

第五十四回

河東に寇し武周は入りて犯し 美良に戦ひ叔寶は功を豎つ

第五十五回

敬徳に降り河東大いに定まり 李藝を救ひ兄弟相逢ふ

卷十二

第五十六回

士信は鎗もて玄應に挑み 敬徳は槊もて雄信を刺す

第五十七回

秦王（李世民）は兵もて洛陽を圍み 鄭王（王世充）は夏主

（竇建徳）を救はんことを求む

第五十八回

秦王は虎牢にて要を扼し 建徳は汜水にて擒に就く

第五十九回

羽翼孤となり鄭王は面縛し 交情深く叔寶は割股す

第六十回

二愍除かれ秦王は眞に即き 百戦の勳もて叔寶は爵を錫はる

（1）井村氏の父、米太郎氏は本書卷四上・四月二十二日條に靈寶館の「主任」

として登場している。

（2）董康所蔵の本版『剪燈叢話』は、程毅中「十二卷本《剪燈叢話》補考」（『文獻』一九九〇年二期、『程毅中文存』二〇〇〇年九月、中華書局、再録）によれば「北京圖書館（現國家圖書館）善本部」に歸したという。

（3）前掲の程氏論文は、本書に「編輯姓氏」はないが、本書の虞淳熙の序に「自好子」が編したことが記されているといひ、本書収録の小説は「唐以後」ではなく、六朝のものも存在することを指摘する。また陳良瑞（『剪燈叢話』考證）「文學遺產增刊」第十八輯、山西人民出版社、一九八九年三月）および程氏論文は所收作の資料源と作者の考證を行い、「剪燈叢話」がもとの題名と作者名を妄りに改めるところが殆どであることを明らかにしている。本書を董康のごとく「内に未だ傳本を見ざる有りて、殊に貴ぶべきと爲す」と評價することは困難である。

（4）程氏論文によると、原書は「金縷裙記」の撰者名を缺くが、實は宋の高彦休の作であり、本作は彼の『關史』卷下の「韋進士見亡妓」であると

いう。

（5）『劍嘯閣批評出像隋史遺文』の書名は、『古本小説叢刊』（中華書局、一九九〇年八月、影印早稻田大學所蔵細野燕臺舊藏本）や『古本小説集成』（上海古籍出版社、一九九二、影印國會圖書館所蔵本）によると目録のもので、本文巻頭は「劍嘯閣批評秘本出像隋史遺文」とある。

（6）「吉衣主人」は、明の袁于令（明萬曆二十七―二五九九）―清康熙十三（一六七四）の別號。袁于令はまた名を晉といひ、「劍嘯閣」とも號し、戯曲作家として著名。大塚秀高『増補中國通俗小説書目』（汲古書院、一九八七年五月、頁二〇三）には、北京圖書館（現國家圖書館）と北京大學などの中國所蔵本が記されているが、董康本の現蔵は未詳。ちなみに劉文忠校點本（中國小説資料叢書）、人民文學出版社、一九八九年九月）の書影には田安家の藏印（田安／府芸／臺印）方印）が捺された本を掲載する。

十五日

早朝、土砂降りの雨。昨日、今日は大學林と金堂の内部を見學し、歸り道に法隆寺に回って百萬塔を調査するつもりであったが、私達が雨具を用意していなかったので中止した。八時、永代祠堂に行き参拜し、線香代に百圓置いておく。水原にお別れし、女人堂から下山。私

達は登山車（ケーブルカー）の最後尾に座った。下を見ると見渡す限りの白雲。ケーブルが鋭角状になっていることに始めて気付いた。天地の境目を見ることができない。元來た道をと、午後二時半に京都驛に到着。旅館に戻って少し休憩してから、大丸に買い物に行く。それから小林の工場に行き、長い閒撮りためた書籍の寫眞を調べる。私達の乗船券は上海丸と長崎丸の二つの連絡船に限定されていたが、歸國の氣持ちが高まったので、豫定を早め小林から船會社に頼んでもらい、歐州航路の秩父丸に乗り換えることにした。相談がうまくゆき明日の出發に決まった。宿に戻るとすでに夜中の十二時になっていた。

#### 留別水原上人

水原上人に留別す

杖策青岩愜壯游 青岩に杖策して壯游愜ひ

高寒此是古瀛州 高寒 此れ是れ古瀛州

梵魚遙和霜鯨遠 梵魚は遙かに霜鯨に和して遠く

文教翻從慧業留 文教は翻て慧業に従ひて留まる

世變遑知談魏晉 世變 知るに遑あらんや 魏晉を談ずるを

地靈祇許住樊劉 地靈 祇だ許さん 樊劉を住ましむるを

空王禮罷催歸去 空王に禮し罷はりて歸り去らんことを催し

一雨淋漓助悵惆 一雨淋漓として悵惆を助く

水原上人とのお別れに遺す詩

青い岩の路に杖をつき高野山に來て今回の大旅行に心滿ち足り、標高が高く寒氣を感じるこの山は古くから傳えられる瀛州である。讀經の聲と木魚の音は彼方で鳴る大きな梵鐘と合わさって遠くまで響きわ

たり、一山の學問と教育はかえって上人のような天才の學僧に任して長くのこると思われる。今は時代の移り變わりが激しくて魏晉交替の歴史も語ることができず、土地の神靈はただ樊劉夫妻のような道術を備えた夫妻だけがこの山に住むことを許すであろう（それゆえ我ら夫婦はここに住むことなどできない）。御佛に拜禮し終われば歸りを急かすような天候となり、雨がざあざあ降り續いて別れの悲しみを増した。

(1) 原文「航歐之秩父丸」。日本郵船會社の秩父丸は横濱とサンフランシスコ間の航路をとる大型客船で、神戸・上海に寄港した（松浦章「日本郵船會社の桑港航路案内」、「或問」第二五號、二〇一四年六月、頁四参照）。それゆえ「航歐」ではなく、正しくは「航美（中國ではアメリカの略號を「美」とする）」である。

(2) この句は解釋し難い。今、假に「梵魚」を「梵（佛典を誦える）」と「木魚」とし、「霜鯨」は、霜の降りる空に響き渡る大きな梵鐘の音の意味に解釋した。元の張經の「瀟湘八景・煙寺晚鐘」詩（『御選元詩』卷六六）に「鯨音送殘照、敲落楚天霜（鯨音は殘照に送り、敲き落つ楚天の霜）」とある。

(3) 「慧業」は「智慧に裏つけされた行爲」（中村元『佛教語大辭典』東京書籍、一九八一年五月、頁一〇六）。ここでは「慧業文人（才人）」、すなわち文學面の天賦の才能をもち、文字の縁を結んでいる人物をいい、水原堯榮上人を指す。本書卷二・二月二日條注参照。

(4) 「樊劉」は、上虞縣（浙江省）の長官であった劉綱とその妻の樊夫人。夫婦ともに道術を使い、天界に登ったという（『太平廣記』卷六〇「樊夫人」。また宋の施宿等『會稽志』卷九に「大蘭山は縣（餘姚）の東南八十里に在り。傳へて云ふ、劉樊夫婦、此の山に於いて仙去す」とある。

(5) 「空王」は佛教語、佛のこと。清の錢謙益「碧雲寺」詩（『初學集』卷二）に「禮罷空王三歎息、自穿蘿徑拄孤藤（空王に禮し罷はりて三たび歎息し、自ら蘿徑を穿ち孤藤を拄く）」とある。

(6) 「淋漓」は滴り流れ止まない様、またその音。ここでは降り止まない雨の音。宋の張耒「無題二首」其二（『柯山集』卷二十四）に「晚起清秋

一枕涼、四簷鳴雨下淋浪（晩に起き清秋 一枕涼しく、四簷の鳴雨 下ること淋浪たり）」とある。

書舶庸譚八下終

## 十六日

晴れ。九時、旅館を去る。小林父子などと京都驛に行く。狩野が先に來ていた。手を取って別れを告げる。昔なじみを子細に數えようと、彼ただ一人であり、後ろ髪を引かれる思いがした。またも小林達が神戸まで付き添い見送ってくれ、乗船する。私達の船室は一四四番であった。秩父丸の出航時間が延びたので、上陸して大丸で晝食をとる。また小林が付き添い見送ってくれ、船に戻る。二時に碇が上げられる。船體は一七五〇〇トンあり、歐州航路の最新の船である。設備が行き届いており、プールまである。たまたま他の船客と離れ、袁某氏と向かい合わせであったので、途中、寂しくなかった。

## 十七日

晴れ。船足がとても速い。早朝起きてボーイに尋ねると、四時に下關を通過した由であった。夕方近くに土砂ぶりの雨になる。晚餐の後、客室艙で映畫を上映し客を楽しませる。

## 十八日

晴れ。午後一時、黄浦江の滙山埠頭に到着。玉姬が家族を連れて岸壁で待っていた。心如と別れ、車を備って家に歸る。